

「部落差別の謎を解く キヨメとケガレ」

著：川元祥一

様々な人権問題に取り組む中で、部落差別の問題は特に扱いにくい人権問題と認識されているように思います。その理由の一つに、なぜ部落差別があるのか？はっきりとした起源が見つからないからではないでしょうか。

部落差別の背景には、歴史的な経過の中で、死んだ牛馬の処理など、死に関わる仕事をされて、いわゆる「ケガレ意識」が差別につながってきたことと、それを清める仕事などの、キヨメとケガレとの関係があります。元々は死の穢れを怖れて、それを忌避したことから始まりました。穢れた人に触れると、その人も不幸になるという迷信もささやかれていました。しかし、一方では杉田玄白の解体新書を書くときには、人の死にも関わってきた、被差別部落の人に体内の臓器についてアドバイスを受けて書かれています。

江戸時代の被差別部落は「社会外の社会」ではなく、地域社会にはなくてはならない社会的役割の仕事がありました。死んだ牛馬の処理の他、警備・神社仏閣・城のキヨメなどですが、当時のエタ頭の弾左衛門が書き上げた「役目」には、12項目の被差別部落の仕事が書かれていました。その様々な仕事をする権利が持たされ、その代償として受け取ることが、偏見につながったのではないかという見解もあります。

その後、解放令が出されますが、その時に、仕事も切り捨てられ、技術が必要な皮革産業などが残り、穢れに対する差別だけが残ったのではないか？それまで差別されていた仕事をする事で、自分たちも非人と間違われるのではないかと、被差別部落の人たちがやっていた仕事を担う人がいなかったのです。切り捨てられた人たちは、職を失い部落民は困窮し差別だけが残ったのではないか。

解放令によって、みんな平等になったにもかかわらず、差別だけが残ったのはなぜか？気になっていましたが、今回の川元さんの見解で、理解できたように思います。

